

主日礼拝説教「光の中で闇を見る」予稿

日本基督教団石神井教会 2023年11月5日聖徒の日

【旧約聖書日課】創世記 3章1～15節

1主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。

「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

2女は蛇に答えた。

「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

4蛇は女に言った。

「決して死ぬことはない。5それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

6女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

7二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

8その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、9主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

10彼は答えた。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

11神は言われた。

「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

12アダムは答えた。

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

13主なる神は女に向かって言われた。

「何ということをしたのか。」

女は答えた。

「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

14主なる神は、蛇に向かって言われた。

「このようなことをしたお前は
あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で

呪われるものとなった。

お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。

15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に

わたしは敵意を置く。

彼はお前の頭を砕き

お前は彼のかかとを砕く。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 3章13～21節

13 天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。14 そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。15 それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。18 御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

「どこにいるのか」【こども説教のために】

最初の人アダムと女（エバ）は、蛇に唆されて、神が「決して食べてはならない」（創 2:17）と命じられていた「善悪の知識の木」から果実を取って食べてしまいました。蛇は、「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」だろうと言っていたのです。果たして、二人がその実を取って食べてみたとき、目が開けて知ることになったのは、自分たちが裸であるということでした。彼らは、いちじくの葉で腰を覆いました。裸の自分を隠そうとしたのです。けれども、それで自分をすべて隠せたわけではありません。風の吹くころに主なる神がおいでになると、彼らは、神に見られまいとして木の間に隠れました。「どこにいるのか」と、神はアダムを呼ばれます。神はもちろん、彼がどこにいるのかおわかりだったでしょう。ただ、彼が隠れようとしていたので、敢えて彼をお呼びになったのです。

「どこにいるのか」と、わたしたちも呼ばれて、ここに出てきました。わたしたちは、隠れません。アダムと同じように裸の自分を見せることを恥ずかしがりますが、もはや裸ではないからです。イエス・キリストという衣を着せていただいているので、わたしたちは、お呼びいただいた方の前に恥ずかしがらずに進み出ることができるようにされているのです。

善悪を知る者となる

わたしたちの教会で礼拝が始まる前に点かれる「鐘」は、4年前の11月最初の日曜日に据えられました。ただし、最初は主日礼拝のために鳴らされたわけではありません。死者の記念のために鳴らされました。その前の週に逝去されたK姉が、亡くなる直前にご家族と共に「鐘」を奉獻されていました。そして、日曜日の午後から執り行われた葬儀で初めて、その「鐘」は、永遠の命への呼び声として、参列者全員によって打ち鳴らされたのです。主日礼拝のたびに鳴らされるようになったのは、翌春、三年前のコロナ禍で集まることを断念した復活祭（イースター）礼拝からのことです。礼拝奉仕者のほかには誰も集まらなくなった教会堂で鳴らされ続けた「鐘」を、わたしたちは、集まりを再開した後も、すべての人を「永遠の命」の交わりへと招き集める呼び声として、鳴らし続けているのです。

「創世記」は、最初の人アダムと女（エバ）が「エデンの園（楽園）」から追放されたと物語ります。主なる神は言われるのです、「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」（創 3:22）と。けれども、主イエス・キリストは十字架の上で、隣に磔にされていた犯罪人に向けておっしゃいました、「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（ルカ 23:43）と。十字架に上げられた主イエスは、そこで死なれることによって、わたしたちをもう一度「楽園」に連れ戻してくださるというのです。けれども、それは、わたしたちも一度、主イエスと共に死ぬことによってなのでしょう、あの隣に磔にされていた犯罪人と同じように。

最初の人アダムに、神は、「園のすべての木から取って食べなさい」（創 2:16）と言われ、続けて命じられたのです、「ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」（同 17 節）と。なぜなら、「食べると必ず死んでしまう」（同）からです。しかし、その木の実は、毒リンゴだったわけではありません。女が食べ、男が食べたとき、彼らは、ただちに死ぬことはありませんでした。確かに、考えてみれば、神が敢えて人の手の届くところに毒リンゴを実らせるようなことをなさるとは思えません。女に語る蛇の問いは、もっともです、「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」。そうです、「決して死ぬことはない」でしょう。ただ、あなたは「神のように善悪を知るものとなる」だろう、と。

けれども、そうであればこそ、神は人を「必ず死ぬ」者として「楽園」から追放されたのです。「神のように善悪を知る者」となったからには、死ななければなりません、主イエス・キリストのように。それが、「神の子」として人を「楽園」に連れ戻す者に課された道だからです。

「裸」であるならば…

確かに、神は、最初の人アダムを「楽園」から追放なさったとき、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた（創3:23）のです。「土」は「アダマ」です（同2:7）。「人＝アダマ」は「土＝アダマ」から取られた者です。神は、楽園の外で、アダムに人を耕させることにされたのです。人が実を結ぶようになるために、アダムは仕える者として生きるのです。それが、アダムの、人の、楽園から送り出された者の、生きる道なのです。

「ヨハネ福音書」は、「**神が御子を世に遣わされた**」と言います。それは、「**御子によって世が救われるため**」です。楽園から送り出されたアダムによっては、世界が完全に救われることはなかったのです。

アダムは、人は、確かに「神のように善悪を知る者」となったのです。「神は何と言われたのか」と問い、自ら善と悪を見分けようとする者となりました。わたしたちも、善と悪を判別できていると思っています。場合によっては、「聖書」に記されている神の命令さえ疑って、「神は本当にそんなことを言われたのか」と問うて、自分の思慮や良心に頼った答えに満足することさえあるでしょう。「何が善で、何が悪か、わたしは分かっている」と。

けれども、わたしたちは、常に問われています、「それで、あなたは救われているのか。あなたの置かれているこの世界は命を回復しているか」と。

それでも、神がアダムを楽園から送り出され、互いに仕え合って生きる道へと行かせられたのは、なぜでしょうか。アダムが、自分は裸であることを知るようになったからではないでしょうか。人が裸の自分を知ようになった者だからではないでしょうか。楽園の光に照らされて、隠さなければすべてが露わにされてしまう「裸の自分」を知るようになったとき、人はもはや、神から逃れられなくなったのです。いいえ、神の顔を避けて隠れようとしながら、「どこにいるのか」という神の呼び声に応えずにいられない者となったのです。

それこそが、日曜日の朝、教会へと呼び集められてきたわたしたちの姿なのでしょう。裸のわたしたちは、自分の為してきたすべてを、神の御前で白日の下にさらされているのです。もはや、言い訳も虚しく、頭を垂れるしかありません。けれども、神は、今や、わたしたちに、命の木からも取って食べるように、おっしゃるのです。世に遣わされ、死んで楽園への道をすべての者に拓いてくださった主イエス・キリストが、命の木の実りとなってくださったからです。「取って、食べよ」と、主イエスは御体を差し出してくださいます。裸のわたしたちを覆う御衣となってくださいます。再びここから遣わされて行くとき、わたしたちも主イエスと共に、人々に命を差し出すことを通して、彼らを楽園に連れ戻すための道に行くのです。